

# 洋画家入江一子

IRIE KAZUKO

シルクロードを描き続ける



第83回独立展（東京六本木・国立新美術館）にて。流れ出る色彩とパワフルな筆触を注ぎ込んだ200号の大作。

『女子美は、とにかく活気でモダン、お洒落でした。』

入江一子先生は、今年、同窓会と同じ絵を重ねて百歳。林武氏より「芸術至上主義」の裏陶を受け、ひたすら絵を描き続けてきました。今回、入江一子シルクロード記念館にお訪ねしたとき、開口一番お話し下さったのは、女子美での思い出でした。

女子美に憧れて日本へ

入江先生はお父様の仕事のご都合で韓国・テグで育ちました。その後、「絵を描きたい」と心で日本へ渡ったとき、ティアズは違う日本の経験を色気に、まさか想像していました。

「とにかく活気でモダン、お洒落でした。」と入江先生がおしゃるほど、女子美は自由な校風で、岡田三郎助、藤田嗣治、外山卯三郎と教授陣も豪華でした。時には新宿などに繰り出することもありましたが、小学生のとき

に心に決めた「一日1枚描く」という日課は欠かしませんでした。戦争への向かった短い時代でしたが、226事件当日の雪の日も、腕声を聞きながら登校されました。

入江先生が女子美を卒業して、ティグに戻ったときのことです。縁あきと言葉もわからぬ中国ハリビン、チチハルの地で個展を開催することになりました。そのときに見たのが、ノンコウの川面を真っ赤に染めた夕陽でした。まさに運命の出会いのような色彩は、入江先生の心に強く残りました。



## PROFILE

入江一子／いりえ かずこ

1916年山口県出身。1938年（昭和13年）女子美術専門学校修業科西洋画部（現女子美術大学）卒業。1947年、女画廊画協会創立会員。1957年、独立美術協会会員。2011年「女子美芦井賞」受賞。



昨年10月には、浜松・秋津町国民美術館で「入江一子展」～シルクロード色彩伝～を開催。開会式には入江先生も出席され、作品のエピソードなどを語られました。  
写真提供：静岡新聞

こともあったそうです。  
「強く印象に残った土地はイスタンブルだ。」とおしゃる入江先生ですが、そこには風景こそが、ノンコウと同じ燃えるような太陽でした。この色彩に出会うために、旗をしょげたのも珍れないそうです。

## 百歳、その先へ

2000年にはアートフェスティバルを改築して、入江一子シルクロード記念館をオープン。2009年にはニューヨークで個展を開き、自ら現地に赴いてニュヨーカーたちから大喝采をあびました。入江先生は現在も精力的に創作を続け、展覧会を次々と企画されています。

最後にそのパワーの源をお聞きしました。「よく働きよく休むこと。無駄な時間は過ごしません。もしろ興味があるが欲しくて遊んでいます。」とお目元を笑顔で話されます。今が一番、絵が描けるとのこと。そのためにも、カラダを大切にしたいとおっしゃいます。

この方も予定がぎっしりで、さらに、インドや台湾からもお誘いがあるとのことです。百歳を迎える今年も、その先も、入江先生はしっかりと歩み続けているのです。

## シルクロードにあとの色彩を求めて

入江先生は、もともと石仏に興味があり、日本中をまわっていました。あるとき、台湾で日本とは違う石仏を見つけていたことで、大陸に興味を持つようになりました。気がつくとシルクロードの国々を30カ所も歩んでいたそうです。

数々に歩いていた頃は、長期休暇を使っての旅で、ご苦労もありましたが、ひたすら描き続けました。訪れた地で戻ったら、その場で描くのが入江。芸術家として持つべきもの、即ち、その場の音を録音し、日本で描き進めるときにその音を流しながら情報を思い浮かべる



中国四川省西駒嶺山の青いケシ／1992  
標高4300mへ。



入江一子  
シルクロード記念館



アトリエを建てて設立。一歩入ればトロールが広がります。

〒166-0001 東京都墨田区押上北2-19  
TEL: 03-3338-0239 [JR両国駅から徒歩6分]  
<http://iriekazuko.com/>

営業時間：土・日曜日 11時～17時  
休館日：年末年始（12月25日～1月3日）

入館料：500円（中・高校生 300円／小学生以下無料）

2016年10月 日本橋三越本店・入江一子個展

2017年1月 上野の森美術館・入江一子個展

※会場により予告なし日程・内容など変更となる場合があります。ご了承ください。



イスタンブルの駁船け／1974



緑南（緑南少数民族）／1999



カシガルの駁船け／1994  
女子美術大学美術附属研究所